A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

35

トーマス・マン

ある詐欺師の告白　高橋義孝訳
トニオ・クレーゲル　福田宏年訳
ヴェニスに死す　関　楠生訳

中央公論社

世界の文学　35　©1965

トーマス・マン

訳者　高橋義孝
福田宏年
関　楠生

"Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull"
by Thomas Mann
Copyrighted by H. E. Pringsheim, Tokyo.

昭和40年6月1日初版印刷
昭和40年6月10日初版発行　価430円

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

ある詐欺師の告白　3
トニオ・クレーゲル　361
ヴェニスに死す　435
解説　510
年譜　522

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

ある詐欺師の告白

――フェリクス・クルルの回想録――

第一巻

第一章

おれが筆をとって、隠棲の日々の暇にまかせて――それはそうとおれは健康だが、ただ疲れている、ひどく疲れている（だからきっと、わずかな段落ずつ、それも休みやすみしながら、やっとどうにか書きすすめてゆけるだけだろう）、つまり、おれが筆をとって、生来の、さっぱりとしてこのましい筆蹟で、辛抱強い紙にこの告白を書き記そうとしてみると、いったいこのおれには、教養とか学歴とかからみて、こういう精神的な企てをこころみる資格があるだろうかという疑惑がふと脳裏をかすめる。しかし、おれがつたえようとしているものはみな、純粋におれ自身の直接の体験、誤謬、情熱からなっているものであって、けっきょくおれは、素材を完全に手中に収めているわけだから、この疑惑はせいぜい、おれの意のままになる表現の巧妙さと節度とにかかわってくることになるが、おれの考えでは、この表現の問題となると、正規の学校教育を立派に修了したということよりも、天賦の才とか、幼いころいい躾をうけたかどうかということのほうが、はるかに決定的な力をもつものなのだ。幼時の躾ならおれにも欠けてはいなかった。おれは、ふしだらではあったが、上流市民の家に生まれたからだ。姉のオリュンピアとおれとは、数ヵ月にわたって、ヴヴェ生まれの女家庭教師の監督をうけたが、この女とおれの母親とのあいだには恋仇という関係――それもおれの父親をめぐって――が生じたので、彼女はむろん一敗地にまみれて去って行かなければならなかった。おれの名付親のシンメルプレースターはかなり名高い芸術家で、おれとはごくうちとけた間柄だった。かれは故郷の小さな市ではみなに「教授」と呼ばれていたものの、この立派な望ましい称号が公式にかれに贈られたことはなかったようだ。おれの父親は脂肪ぶとりに肥っていたが、風采にはたぶんに優雅なところがあって、つねに精選された、明晰な言葉づかいを尊重した。祖母からフランスの血をうけついでいたかれは、修業時代をフランスですごし、その断言するところによれば、パリを自分のチョッキのポケットの中身同様によく知っていた。好んでかれは――それも見事な発音で――「そうですとも」、「これはすばらしい」、「まさにそのとおり」などという言いまわしを会話に織りこみ、また、しばしば「わたしにはこ

の味がわかる」ともいったものだが、とにかくこの世を去るころまで、女たちのお気にいりだった。これはただあらかじめ、番外として書いておく。一方、いい形式に対するおれの生まれ持った勘に関しては、おれの詐欺師としての全生涯が証明するとおり、むかしからおれはこれに微塵もゆるがぬ自信をもってきたのであって、いまこうしてものを書いて登場する段になっても、無条件でこれを信頼しうると信じている。とにかくおれは、この手記をあくまでも赤裸々に書きすすめていって、ひとが自惚れとそしろうと、恥しらずとなじろうと、いっこうに意に介さない決心である。誠実という観点以外の観点に立って書かれた告白などに、いったいどのような道徳的な価値や意義がみとめられようか。

おれは、気象といい、地勢といい、ともにおだやかで険しさをしらず、都市や村落がゆたかにちりばめられ、ひとびとが心たのしく住みなしているライン地方に生まれた。たしかに、もっとも快適な地方のひとつにかぞえられるあのめぐまれた地帯である。ライン地方の連山が楯となって荒い風をさえぎっているここには、真昼の太陽のもとに幸福にのびひろがりつつ、その名の響に酒客の心臓が笑い出す、あのいくつかの著名な市が花咲いている。ここにはラウエンタール、ヨハニスベルク、リューデスハイムがあり、ここにはまたドイツ帝国の光栄ある成立の年からわずかに数年おくれておれがこの世に生をうけた、あの尊敬すべき小都市がある。これはライン河がマインツ近辺で描く湾曲部のやや西よりにあって、シャンパン酒醸造で名高く、ライン河を上下にいそぐ汽船の主要碇泊地であり、人口はおよそ四千をかぞえる。だから、あのおもしろおかしいマインツもすぐ近くなら、タウヌスの上品な温泉場、ヴィースバーデン、ホンブルク、ランゲンシュワルバハ、シュランゲンバートにも遠くはなく、シュランゲンバートへ行こうと思えば、狭軌鉄道に半時間も乗ればよかった。このましい季節には、おれたち、両親と姉のオリュンピアとおれとは、船に乗り、馬車を駆り、汽車に揺られて、東西南北あらゆる方角に、いくど遠出をこころみたことであったろう。いたるところに自然と人間の機智とがつくり出した歓楽境があり、名所旧跡があって、おれたちを誘ってやまなかった。こまかい碁盤縞の気持のいい夏服を着たおれの父親が、おれたちといっしょに、とあるレストランの庭に——腹が邪魔になって近づけないので、卓からすこし離れて——すわり、かぎりない満足をもって黄金いろの葡萄酒をのみ、川海老料理を味わっているさまが、いまもまざまざと眼にうかぶ。おれの名付親のシンメルプレースターもよくおれたちといっしょに出かけて、絵描きが

使う丸い眼鏡ごしに、土地と人間とを鋭く吟味しながら観察して、雄大なものも微細なものも、その芸術家の魂のなかにとりいれた。

おれのおやじというひとは、いまはなくなったシャンパン酒「ロルライ・エクストラ・キュヴェ」の醸造元エンゲルベルト・クルル商会の持主だった。ライン河畔の、桟橋から遠くないところに商会の酒蔵があって、子供のころ、おれはよく、その冷えびえとした円天井の下をあるきまわり、たかい台架のあいだを縦横にはしっている敷石のほそい道ぞいに、物想いにふけりながら歩を運んで、台架になめにねかしてつみかさねてある壜の大群をながめたものだ。おまえたちはそこに横たわっている、とおれは考えた（もちろんおれはそのころまだ自分の考えを適切な言葉で表現するすべを知らなかったが）、おまえたちは地下の薄明りにつつまれてそこに横たわっている、そして、おまえたちの内部では、あまたの心臓の鼓動をたかめ、あまたの双眼を惰眠からときはなってひかりかがやかせる、あの刺激的な黄金いろの漿果汁が、しずかに澱をしずめつつ醸されている。いまはまだ、裸形でみばえもしないが、いつの日か、おまえたちは、絢爛と飾られて地上にのぼり、祭典や婚礼を祝って、料亭の特別室の天井に音もほがらかに栓をうちつけ、陶酔と放恣と快楽とをひろめるのだ。ざっとこんなことを子供のおれはつぶやいたが、すくなくともエンゲルベルト・クルル商会がその壜の外側を、専門的にはコアヒュールと呼ばれるあの仕上げの装飾を、たいそう重く見ていたことはたしかだ。ねじりこまれたコルク栓は、銀線と金を塗った糸とでしっかりとおさえられ、その上を真赤な封蠟で封じられていたが、さらに特別に教書や古い国家文書に見られるような、荘重な円封印が金モールのさきにぶらさがっていた。壜の首にはきらきらした錫箔がたっぷりと着せられ、胴には、おれの名付親のシンメルプレースターが商会のために考案した、黄金いろの唐草模様で飾られたレッテルがいかにも派手に貼ってあって、このレッテルにはいくつかの紋章と星、金文字で印刷されたおれの父親の署名と「ロルライ・エクストラ・キュヴェ」という商標のほかに、腕輪と首飾りだけを身につけて岩の頂にすわり、脚をくみ、腕をかざして、波うつ髪をくしけずっている女のすがたが見られた。ところで、この葡萄酒の品質は、こうしたまばゆいばかりの外装と完全に一致するものではなかったらしい。「クルル」とおれの名付親のシンメルプレースターはおれの父親にいったものだ。「あんたの人格は尊敬しているが、しかし、あんたのシャンパンは警察が禁止すべきものだね。一週間まえのことだ。わたしはついうっかりあんたのシャンパンを壜半分ほど飲んでしまったのだ。いやはや、その

猛烈なこと。きょうになってもまだ様子がおかしい。いったい、あんたはこの酒にどんな出来そこないの葡萄酒をまぜるのだ。石油かフーゼル油でも割るのじゃないのかね。要するに、毒を盛っているわけだ。法律というものがあるんだから、用心したまえよ」おれの父親は辛辣な言葉で渡り合うことのできない気の弱い男だったから、こういわれると困ってしまった。「あんたはすぐひとをからかうんだからなあ、シンメルプレースター」それが癖で、指さきでそっと腹をさすりながらおれの父親は答えた。「ぼくは安くつくらなければならないのだよ。国産の酒は安いものだという偏見があるからね——つまり、ぼくは大衆の望みどおりのものを売るわけさ。それに、競争がはげしくてねえ、もちこたえるだけでも楽じゃないのだ」これがおれの父親の精いっぱいのところだった。

おれたちの邸は、なだらかな斜面にもたれて、ラインの眺望をほしいままにする、あの典雅な上流地区にあった。傾斜した庭には、陶製の侏儒や、茸や、本物そっくりにつくられたさまざまな獣たちがふんだんに飾りつけてあった。ある台座の上には、ひとの顔がとびきり滑稽にゆがめられてうつるガラスの球がのっていたし、風にふれて鳴る竪琴もあれば、いくつかの洞窟もあった。噴水は数奇をこらしたかたちに水を噴き上げ、その水盤には銀色の金魚が泳いでいた。屋内は、これはおれの父親の趣味にしたがって、居心地もよく快適にしつらえられてあった。家の角にある物見の小部屋は来てすわるようにと招いていたし、そのひとつには本物の紡車が据えてあった。小さな置物や、貝殻、小さな鏡箱、香水壜など、無数のこまごましたものが、段棚やフラシテンを張った小卓の上にならんでいた。おやじはやわらかなものの上に横になるのが好きだったから、ソファや安楽椅子の上にはいたるところに、おびただしい数の絹や多彩な刺繍をほどこした羽根布団が置いてあった。カーテンは中世の戟を横木にして垂れていたし、扉口には、葦とさまざまな色の真珠の糸とでつくられた、一見かたい壁のように見えるが、そのじつ手を挙げることもなしにとおりぬけることができ、そのときかすかに、かるくさわやかな音をたてて分かれてはまた閉ざされる、あのかるやかな帳がかけてあった。玄関には工夫を凝らした小さな機械がとりつけてあって、扉が風圧にひきとめられて、ゆっくりと閉まってゆくあいだ、微妙な響をもって、「ようこそ生を」という歌の冒頭をかなでた。

第二章

五月のとあるなまあたたかい雨の日に——しかも日曜日に——おれが生まれた家は以上のようであったが、こ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

こからはもう先ばしりしないで、時の経過に従って、仔細に書いてゆくことにしよう。おれの誕生は、もしおれに教えられたことがほんとうなら、しごく長びいて、そのころうちのかかりつけの医師だったメークム博士による人為的な助力をまっておこなわれたが、それは主としておれが――あのやっと形をなしたばかりの奇怪な生きものを「おれ」と呼んでもいいとしてのはなしだが――そのとき、異常に活気のない、無関心な態度をとって、母親の懸命の努力をほとんどまったく助けようとしなかったということに、やがてはあれほど熱烈に愛することになるこの世界に生まれ出るのにいささかの熱意をもしめさなかったということに、原因があった。それでもおれはすこやかな、すがたのいい子供で、優秀な乳母の胸に抱かれて、すくすくと、いかにも末たのもしく育っていった。おれはいくどとなく徹底的に考えてみたが、誕生に際してのおれの怠惰な、いかにも不承不承な態度、母親の胎内の暗がりを白昼の明るさととりかえることに対するあきらかな嫌悪は、ちいさい時からおれの特性になっていた、睡眠に対する異様なまでの愛着や才能と関係があると思わずにはいられない。おれはものしずかな子供で、泣きわめいたり他人の平和を乱したりすることはなく、子守女たちにとってはきわめて好都合なまでに、まどろみや、うたたねにふけったということだ。おれはのちには、世界と人間とを渇望するあまり、いろんな名前をかたってそのなかにまぎれこみ、かれらの心をとらえるためにいろいろなことをしたが、それでも、いつも夜と睡眠とが心から好きで、からだが疲れているときでなくてもらくらくと眠りこみ、夢さえ見ずに忘却の世界をさまよって、十時間、十二時間、それどころか十四時間にもおよぶ熟睡ののちに、元気を回復して、ひるまの成功や満足で味わうよりも、もっと爽快な気持で眼をさましたものだ。この異常な嗜眠欲には、おれを鼓舞して生と恋とにかりたてた勃々たる衝迫、あとで、適当なところでもっと話すつもりでいるこの衝迫と、矛盾するものがあるようにみえるかもしれない。しかし、まえにもいったとおり、おれはこの点に関しては、くりかえし全精神を集中して考えぬいてみたのであって、実際、いくども、このふたつは対立するものというよりは、むしろ、ひとしれず補いあうもの、調和するものだということがはっきりとわかるように思った。すなわち、やっと四十になったばかりだというのに、はやくも老けこみ、疲れはててしまったいま、もはや貪婪な好奇心をいだいて、ひとびととまじわることもなく、自分のなかに閉じこもってだらだらと生きてゆくばかりになったいま、いまになってはじめて、おれの嗜眠の力も衰えてきて、おれはいくぶん睡眠と疎遠になってしまい、眠っても熟睡する

ことがなく、うつらうつらしてはすぐ目をさましてしまう。ところがむかしは、眠る機会のたっぷりあった監獄のなかでなど、ひょっとすると、豪華なホテルのやわらかなベッドにねるときよりもっとふかぶかと眠ったものだ。――しかしおれは、むかしながらのわるい癖で、さきをいそぎすぎたようだ。

おれはよく家族の口から、おれは日曜日に生まれた幸運児なのだといいきかされた。おれは迷信とはいっさい無縁な育て方をされた人間だが、それでもこの事実に、幸福を意味するフェリクスという名前（おれは名付親のシンメルプレースターにならってそう名づけられた）や、おれの優雅で人好きのする肉体を思いあわせて、いつもある神秘な意味をみとめてきた。そればかりか、幸運に対する確信、おれは天の寵児なのだという信念は、つねにおれのこころの奥底にあって、この信念はだいたいにおいて、うそではなかったといっていい。なぜなら、おれが味わった苦しみや悩みはすべて、おれとは縁のないもの、ほんとうは天の欲しなかったものと思われ、おれ本来の真の運命は、いわば雲を射しつらぬく太陽の光のように、そういう苦悩をつらぬいて燦爛とかがやきわたったということこそ、おれの生涯のいちじるしい特徴なのだ。――一般的なものへと筆がそれたが、さて、おれの少年時代の絵を大まかに描いてみよう。

空想的な子供であったおれは、いろいろな思いつきや空想で、よく、家のものたちを笑わせる材料を提供した。いまでも思い出せるような気がするし、たびたび話してきかされもしたことだが、まだ子供服を着ていたころ、おれは、王様になって遊ぶのが好きで、自分は王様なのだという妄想を数時間にもわたって、頑としてすてようとしなかったそうだ。小さな柳枝細工の乳母車に乗り、女中に押させて、庭の小径や玄関をまわりながら、なんのつもりかおれは口を精いっぱい下にひきさげて、上唇が途方もなく長くのびるようにしながら、そろそろと瞬きをしたが、その眼は、顔をゆがめたせいばかりではなく、内心の感動のためにも、充血して、涙をたたえていた。自分の高齢と気高い威厳とにわれながら感動して、おれは、みじろぎもせずに、乳母車にすわっていたのだ。この気まぐれな遊びをないがしろにすることでもあれば、おれはひどく怒り出しただろうから、女中は、逢うひとごとに事情を説明しなければならなかった。「わたしは王様をお散歩におつれ申しているのでございます」女中がこういいながら、でたらめに手のひらを顳顬にあてて敬礼すると、みなはうやうやしくおれに敬意を表した。とりわけおれの名付親のシンメルプレースターはふざけるのが大好きで、そんなふうにしているおれに出逢うと、おれに調子をあわせて、ありとあらゆる手段でおれの自

惚れに油をそそいだ。「これはこれは、老英雄のお通りだ」そういってかれは不自然なほどふかく身をかがめた。それからかれは、沿道に立っておれを迎える群衆の役割を演じ、万歳万歳とさけびながら、空中に帽子をなげ、ステッキをなげ、眼鏡までほうりあげるので、おれが感動のあまり、長くひきつらせている上唇の上にほろりと涙をながすと、かれはどこかおかしくなりはすまいかと思われるほど笑いこけた。

この種の遊びは、おれがもっと大きくなって、もうおとなの手をかりることが許されなくなるころでも、よくやった。おれはおとなの手のかりられないことを嘆くどころか、いよいよ奔放で自足的なおれの想像力をたのしんだ。たとえばある朝日ざめて、おれは今日カールという名の十八歳の王子になろうと決心すると、その日一日じゅう、いや幾日にもわたってこの夢想をもちつづけたが、それというのも、こういう遊びのはかりしれない長所は、どんな瞬間にも、とくにわずらわしい授業時間にも、けっして中断する必要がないというところにあった。おれは愛らしい王子の衣裳を身にまとって歩きまわり、空想のなかでおれに扈従している傅育官とか副官とかと明朗活溌に言葉をかわしたが、自分はみやびやかな権門の子弟なのだという秘密がおれの心を満たした誇りと幸福とはだれにも描きつくすことができない。ファンタジーとはじつに豪華な天の賜物ではないか。じつに壮大な快楽の糧ではないか。おれの生まれた小都市のほかの子供たちには、あきらかにこのファンタジ！の能力があたえられていず、おれが特別の準備もせずに、簡単な意志の決断をもって、たちまち、苦もなくひきだした秘密のよろこびにあずかることがなかったが、おれには、いかにかれらが愚かで、また、損をしているように思われたことであろうか。もっとも、かれらは髪の毛のかたい、赤い手をした、どこにでもいる餓鬼どもで、かれらが自分は王子なのだと考えるのは、骨の折れることでもあり、滑稽なことでもあったにちがいない。ところがおれの髪は、男にはまれにしか見られないような、絹のようにやわらかい金髪で、灰青色の眼とともに、あかるい琥珀いろの肩と魅力のある対照をなしていた。だからおれは、いったいブロンドに見えるのか、褐色の髪に見えるのか、きめかねるところがあったわけで、ひとがおれをブロンドだといっても、ブリュネットだといっても、どちらもまちがってはいなかった。おれははやくから手に注意をはらったが、これはほそすぎもせず、格好もよく、けっして汗ばむこともなく、ほどよくあたたかで、かわいており、優雅な爪がついていて、この手自体がはやひとつの愛玩物だった。おれの声は、声変わりするまえにもう耳にこころよい響をふくんでいて、ひとりでいるときに

は、好んで、眼にみえない傅育官と、たのしく、身振りもゆたかに、意味のない口からでまかせの、漠然としたおしゃべりをしながら、この声をひびかせたものだ。こういう個人的な長所は、概してそれ自体ではその値打をはかることのできないもので、その効果をみてはじめてそれと知られるものであり、衆にぬきん出る才能をもってしても、なかなか言葉で書きあらわせるものではない。とにかく、おれは、自分が同輩たちよりももっと高貴な素材でできている、あるいはよくひとがいうように、もっと良質の木で刻みあげられた人間だということに気づかずにはいなかったのであって、自惚れだと非難するひとがいるかもしれないが、おれはこういいきって憚らないのである。そこいらのだれかれが自惚れだといおうがいうまいが、それはおれにはまったくどうでもいいことで、もしおれが、自分は十把一からげにかぞえられるような安っぽい人間にすぎないなどというとしたら、おれは低能か偽善者でなければなるまい。真実にしたがって、おれは極上の木で刻みあげられた優秀な人間であると、くりかえしていっておく。

孤独のうちに成長しながら（姉のオリュンピアはおれよりずっと年上だった）、おれは奇矯な瞑想にふけり、あれこれと穿鑿するのを好んだが、さっそくここにその例をふたつ挙げておこう。第一に、おれは人間の意志の力、往々にして超自然のはたらきをするこの神秘な力を、おれのからだにためして研究するという気まぐれな思いつきにとり憑かれた。収縮したり拡大したりする人間の瞳孔の運動は、瞳孔にあたる光のつよさに依存しているということはだれでも知っている。ところがおれは、このわがままな筋肉の不随意運動をおれの意志の支配下に屈服させてやろうと決心した。鏡のまえに立って、ほかのいっさいの雑念をしりぞけようとつとめながら、おれは、瞳孔を意のままに収縮したり拡大したりさせることに全精神力を集中した。そして、おれは断言するが、この強情な訓練は、ついに成功したのである。はじめのうちは汗が流れ出し顔色がかわるほどの努力をつづけても、やっと瞳孔が不規則にふるえてくるにすぎなかったが、のちには、実際、自由自在に、瞳孔を収縮させて小さな点にしたり、拡大させて大きな黒くかがやく輪にしたりすることができるようになった。この成功がおれにあたえた満足はほとんどそらおそろしいほどのもので、人間性の秘密に直面したときに感じられる、ある種の戦慄をともなっていた。

そのころしばしばおれの精神をたのしませ、いまでもおれにとってはその魅力や意味をうしなっていないもうひとつの穿鑿は、つぎのようなものであった。この世をつまらないものだとみなすのと、すばらしいとみなすの

と――とおれは自問した――どちらが有益であろうか。それはこういう意味だった。偉大な人物たち、すなわち将軍とか、すぐれた政治家とか、群衆のうえに君臨するあらゆる種類の征服者、支配者というひとびとは、世界は将棋盤のように小さなものだと思うように生まれついているにちがいない。そうでもなければ、かれらは、大胆に、個人の幸不幸には関心をはらわず、自分の概括的な計画にしたがってことを処理してゆく、無情で冷酷な心はもてないはずだ。しかしその反面、このように世界を小さくみる見方は、疑いもなく、人生をついにむなしく終わらせる結果になりやすい。なぜなら、世界をとるにたらないもの、無意味なものとみなし、若いときから世界や人間には価値がないという考えに徹底したひとは――冷淡で、他人には関心をしめさず、自分では努力をしないため、いたるところで衝突して、ことごとに自負心のつよい世間の感情をそこね、ただでさえままにならない成功への道を自分のほうから塞ぎとめるようなことになる場合を度外視しても――無関心や懶惰におちいり、公衆の心にはたらきかけることはすべて軽蔑して、それよりは完全な隠遁生活を選ぶようになりがちだからである。それでは、世界と人間とのなかにどのような熱望、どのような献身的な奮励にも値するなにか偉大なもの、すばらしいもの、重大なものをみとめて、多少の声望と評価とを獲得するほうが賢明であろうか。これに対しては、世界を大いなるものとみて、これに敬意をはらうような見方をもつと、どうしても自分を過小に評価して困惑するという羽目におちいりやすく、そうなると世界のほうでは逆に、恐懼のあまり萎縮したこの子供を微笑しながらみごろしにして、もっと男らしい恋人をさがしにいってしまうということになる。しかし他面、このような、世界に帰依した敬虔な態度には、なんといってもおおきな利益がある。というのは、すべての事柄、すべての人間を、真剣にうけとるべきもの、重大なものとみるひとは、そうすることによってかれらの心をうれしがらせ、確実にそのひきたてをうけるばかりでなく、自分の思想や態度のいっさいを、真摯、情熱、責任感をもって満たすことになるのであって、この責任感こそはそのひとを、他人から愛されるようにすると同時に、枢要な人物にもして、最高の成功と勢力とを得させることができるからである。――こう考えておれは、そのいずれをとり、いずれを捨てようかと心にはかった。とにかくおれは、しらずしらずのうちに、またおれの本性にしたがって、つねに第二の可能性につき、世界を偉大でかぎりなく誘惑的な現象だと考えたが、この世界という現象は、このうえなく甘美な幸福をあたえることができるもので、どのように高度な努力にも希求にも値するものと

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong